

ブックレビュー



『新しい戦前～この国のいま、を読み解く』

内田 樹・白井 聡 著

朝日新聞出版 刊

定価 979円 (本体 890円+税)

政治・経済・社会的に劣化を極めるこの国の現状を解剖する現代版「解体新書」である。オペに臨んで鋭いメスを振るう二人は内田樹と白井聡。

内田は1950年生まれ。フランス現代思想や武道論、教育論などを専門に、神戸で私塾凱風館を主宰する合気道7段。『日本辺境論』(2009年、新潮新書)など多数の著作で現代日本の言論界を主導する「知の巨人」として世評が高い。

白井は内田と親子ほど年が離れた77年生まれ。13年の『永続敗戦論～戦後日本の核心』(太田出版)で一躍脚光を浴び、この出世作はいま講談社+a文庫に収録されている。内田が評価するように熱血・気鋭の政治学者だ。

『日本戦後史論』(15年、徳間書店、のちに朝日文庫)以来3冊目になる二人の対談本は語り尽きることなく、メスの冴え鮮やかにこの国の急所を

抉り出す。二人の執刀で捌かれる病理現象は惨状を呈し、回復不能のように見える。

しかし、内田の不断の活動を見て白井は言う。「空間に人々が集い、寛ぎと自己鍛錬のなかで共生の作法が学ばれ、成熟する。そうした豊かな空間をつくり直すところにしか、いま希望は見出せないのではないか」と。一方、内田は白井をこう評している。「『友を選ばば書を読み、六部の俠気、四分の熱』という与謝野鉄幹の詩がある。(中略)白井さんを見ていると、そういう明治の青年の矯激と覇気を感じる」と。

簡単には立て直せないところまで劣化しているこの国の「新しい戦前」に投げかける本書の問題提起は重い。しかし、「絶望のなかにこそ希望がある」としたら、その希望を見出すための「徹底検証」を、まずは本書から始めよう。「第三次世界大戦はすでに始まっている」という言説が飛び交う現実から目を背けてはならない。
(山海野 玄)